

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

ドイツ語の熟語表現における前置詞の隣接的選択

著者	田中 雅敏
著者別名	Tanaka Masatoshi
雑誌名	東洋法学
巻	56
号	3
ページ	340-327
発行年	2013-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00004117/



《 論 説 》

ドイツ語の熟語表現における前置詞の隣接的選択

田中 雅敏

0. はじめに

形容詞の対義語 (1 a-b) や動詞の三基本形 (2 a-b) を覚えるのに必要なことは、語彙そのものの意味や形式を把握することである。それに対して、前置詞の学習は、前置詞の機能的な意味を知る必要性を伴い、それはドイツ語初級者にとっては決して容易なことではない。ここで「機能的 (funktional)」というのは、〈基準点 [静止]〉や〈到達点 [移動]〉を判断する「空間認識」 (= (3 a-b))、〈状態変化〉や〈位置の変化〉に関わる「非対格性 (Unakkusativität)」といった抽象的な意味 (= (4 a-b)) のことであり、語彙そのものの実質的な意味 (lexikalische Bedeutung) と区別されるものである。

- (1) a. kalt (寒い) ⇔ warm (暖かい) b. früh (早い) ⇔ spät (遅い)
- (2) a. jobben --- jobbte --- gejobbt (アルバイトをする)
 b. trinken --- trank --- getrunken (飲む)
- (3) a. an der Ostsee liegen (バルト海の浜辺で日光浴をする)
 b. an die Ostsee spazieren gehen (バルト海の浜辺まで散歩する)
- (4) a. Ich habe eine halbe Stunde geschwommen. (半時間水泳をした。)
 b. Ich bin ans andere Ufer geschwommen. (対岸まで泳いで渡った。)

(3 a) では、(空間的な) 視点がすでにバルト海の浜辺にある。この場合の前置詞 *an* は 3 格支配であり、女性名詞 *Ostsee* は定冠詞 *der* によって指示され

る。他方、(3b)では、視点はバルト海地方の内陸から浜辺へと移動する。この場合、前置詞 *an* は4格支配であるので定冠詞は *die* で示される。(4a)は、動詞 *schwimmen* が能動的な半時間の活動として表現されており、主語の *ich* は動作主 (Agens) であると理解できる。この場合、完了の助動詞としては *haben* が選択される。それに対して、(4b)では、“泳ぐ” という行為によって対岸に移動したことが伝えられている。移動に焦点があたると、主語の *ich* は能動的な主語ではなく、A 地点から B 地点へと場所を移した主題 (Thema) であると理解される。これは非対格性を伴う用法であるので、助動詞 *sein* に支配される。

このように、前置詞を理解するには語彙的な意味だけでなく、機能的な意味も考慮しなければならない。それは、人間の認知メカニズムが前置詞に高い機能性 (Funktionalität) を付与しているということを示唆している。

本稿では、ドイツ語の熟語表現で用いられる前置詞の選択について、公益財団法人ドイツ語学文学振興会が実施する「ドイツ語技能検定試験 (以下、『独検』と呼ぶ)」3級で出題されている前置詞選択の問題の事例とその解答の傾向を示しながら、ドイツ語初級者が個々の前置詞の意味をどのようにとらえているかを見る。その上で、特筆すべき前置詞について、機能的意味に注目しながら、その振る舞いを考察する。

1. ドイツ語初級者は前置詞をどう理解しているか

本節では、独検3級の過去問題を示し、日本語を母語とするドイツ語初級者がドイツ語の前置詞をどのように理解しているのかについて見ることを目的とする。

以下は、2010年度～2011年度に実際に出題された問題である。独検は春 (6月) と秋 (11月) の2回実施される。問題文の直後に添えた { } の中に示す選択肢のうち、() 内に示す語が正答である。また、それぞれの問いにおける正答率と、特徴的な誤答 (がある場合には) の選択率を示す。過去問題および試験データ⁽¹⁾は、いずれも『独検過去問題集』(郁文堂)からの引用である。

2010年度春期

(5) 試験問題 (DDJ 2011: 104)

- a. Wir haben noch keine Antwort (**auf**) unsere Frage. {*gegen, um, in, auf*}
- b. Du musst mich (**auf**) jeden Fall einmal besuchen! {*um, auf, an, vor*}
- c. Bist du (**für**) den Plan? Ich bin dagegen. {*für, in, über, neben*}
- d. Er hat (**über**) seine letzte Reise geschrieben. {*über, zwischen, unter, auf*}

(5') データ (ibid.: 113f.)

- a. 58% (*gegen*: 20%) b. 24% (*an*: 44%) c. 51% (*in*: 18%, *über*: 22%)
- d. 48% (*auf*: 30%)

(5a) は「自分たちの疑問に対する答えをまだ持ち合わせはない」という表現で、正答率が高いとは言えない (58%)。誤答の中で一番多く選択された *gegen* は〈対抗〉を意味するものであり、日本語対応訳がそのままドイツ語に反映されたものであると推測できる。

(5b) では「いかなる場合にも」という意味の *auf jeden Fall* が用いられている。正答 (24%) のおよそ2倍の割合 (44%) で選択された誤答の *an* は「～に接して」が核となる意味であり、日本語で考えると「あらゆる場合に際して」と解釈できることから、日本語からの直訳に近い選択であると言える。ただしその場合には、「場に臨む」のであるから、(6a) が示すように *an* は3格支配となるはずである (しかしながら *jeden Fall* は、男性名詞4格の形態をしている)。(6b) では「本を一冊書き上げた」ことが伝えられているのに対し、(6a) では「書きかけの本の執筆を前へ進めた」ということが表されている。(5a), (5b) に共通して用いられている前置詞 *auf* の核となる機能的意味は〈出現〉である。*auf* を使うことで、*jeden Fall* が「移動」や「状況の変化」を意味する4格支配であることが説明できる。

(1) 試験データの書きかたは、年度(執筆者)によって小数点の扱いに違いが見られる。もっとも詳しいものは小数点第2位まで表記してあるが、小数点第1位を四捨五入して整数にしてあるものもある(この場合、「約」をつけるべきであるが、本稿では省略した)。

- (6) a. Er hat an einem Buch geschrieben. (成田・中村 2004: 160)
 b. Er hat ein Buch geschrieben. (ibid.)

(5c) は、〈利益の経験者・対象〉を指す *für* が用いられている。この設問の場合、*dagegen* と対になっていることから、「～に賛成・賛同する」という意味の用法であることがわかる。正答率は高くなく、*in* や *über* も一定程度選択されている。しかし、このどちらも4格と結びつくときは〈動き〉を意味するため、動詞 *bist* (*sein* の2人称変化形) と整合性がない。

(5d) の正答 *über* も正解率が50%に満たず、初級学習者が前置詞 *über* の機能的意味の把握に苦勞している実情が浮かび上がる。この *über* は、日本語の「～について」という表現に対応するが、同じ「～について」の意味で前置詞 *von* が用いられることもある (Cf. (7a-b))。出題者の意図に反して正解になってしまう可能性を排除するために、*von* はあらかじめ選択肢から外されている。

- (7) a. Derzeit wird gerade über eine Möglichkeit diskutiert, mehr Kunden zum Einkaufen in das Stadtzentrum zu holen.

(Burgenländische Volkszeitung, 17. 05. 2012)

(目下、買物客をもっと都心に呼び込めるかどうかについて議論されているところだ。)

- b. Das "Land des Lächelns" von Franz Lehár erzählt von der tragischen Liebe zwischen dem chinesischen Prinzen Sou Chong und der österreichischen Komtess Lisa. (Braunschweiger Zeitung, 30. 01. 2012)
 (フランツ・レハール作曲のオペレッタ『微笑みの国』は中国のスー・チョン殿下とオーストリアの伯爵令嬢リーザとの悲恋について語っている。)

2011年度秋期

- (8) 試験問題 (ibid.: 142)

- a. Die Bundesrepublik Deutschland besteht (**aus**) 16 Bundesländern.
 {zu, mit, bei, aus}
- b. Sehr geehrte Frau Schmidt, ich danke Ihnen (**für**) Ihren Brief vom 12. März.
 {auf, für, über, um}
- c. Der Hund kommt jeden Tag zum Bahnhof. Er wartet (**auf**) meinen Lehrer.
 {auf, über, gegen, für}
- d. Meine ältere Schwester ist (**mit**) einem reichen Amerikaner verheiratet.
 {bei, mit, von, zu}

(8') データ (ibid.: 154f.)

- a. 54.56% b. 74.39% c. 58.16% (für: 32.42%) d. 65.19%

(8 a) は〈中から外への出処〉を核となる意味に持つ前置詞 *aus* が用いられている。動詞 *bestehen* (存続する) は、前置詞 *aus* の他、*in* や *auf* と結びつくことができ、*in etwas*³ *bestehen* で「〜に存する」、*auf etwas*³ *bestehen* で「〜を主張して譲らない」ということが表される。正解率は54.56% で、ほぼ半数の学習者が「ドイツ連邦共和国が16州から成る」という文に前置詞 *aus* のイメージを重ねることができなかったことを示している。

(8 b) は、(5 c) で見たのと同じ〈利益の経験者・対象〉を表す *für* を使うことが望ましい。この文は、「3月12日にもらった手紙」がこの話者にとって有益であったことを伝えている。

(8 c) で最も多かった誤答 (32.42%) は *für* であり、これは *to wait for someone/something* という英語の熟語表現に影響を受けたものであると考えられる(「意味的に対応する英語の *wait for* と混同されたものと思われます」(ibid.:154f.)) が、ここでは〈出現〉の *auf* のイメージ (Cf. (5 a-b)) が有効である。動詞 *warten* (待つ) は、「誰か／何かの出現・到来」を待つものである。

(8 d) の正答 *mit* は〈随伴〉の意味を持つ。*mit dem Auto fahren* (自動車で移動する) や *mit dem Handy telefonieren* (携帯電話で通話する) などの「道具・手段」も、*mit 20 volljährig sein* (20歳で成人する) などの「成立条件」も、す

べてこの〈随伴〉もしくは〈付随〉の意味が拡大解釈されたものである。

2. 前置詞の機能的特性

前節では、前置詞の個々の意味や用法が「機能的意味」から派生していることを見た。このような派生的な意味の拡張や拡大解釈は、名詞や動詞、形容詞にも見られるが、これらは実質的な意味内容を持つものに対して、前置詞は時として名詞と名詞、名詞と動詞をつなぐだけの役割（すなわち機能的役割）しかない場合も少なくない。これはなぜだろうか。

言語を構成する品詞の中で、前置詞は名詞、形容詞、動詞とともに語彙範疇（lexikalische Kategorie）に属する。語彙範疇は、一つ一つの単語に実質的な意味があるため、語彙の数は膨大であり、また、新語や外来語からの借用語などでその数は増え続けることができる。しかし、その中にあって、前置詞だけはそもそもの語彙数が限られているうえ、新語や借用語が取り入れられることもない。これは、機能範疇（funktionale Kategorie）と特徴を一にするものである。機能（Funktion）面でも、前置詞は名詞とその他の語句との関係性を表すものであり、これは文と文の関係性を示す補文標識（従属接続詞）の振る舞いと似ている。その点で、前置詞は限りなく機能範疇に近い語彙範疇の要素であると言える。

生成文法理論（Theorie der Generativen Grammatik）では、語彙範疇を〔±N, ±V〕の二値の素性パラメータで弁別することができると分析する（Cf. Chomsky 1981, Riemsdijk 1993, Stowell 1981）：

- (9) a. 名詞 [+N, -V] b. 動詞 [-N, +V] c. 形容詞 [+N, +V]
 d. 前置詞 [-N, -V]

(9 a-d) の弁別素性を考える利点は、〔+V〕の素性を割り当てられたものは述語になれると考えることができる点にある。動詞（= (10a)）が一項動詞や二項動詞、あるいは三項動詞（項；Argument）として名詞句をとることと並ん

で、形容詞（述語形容詞）も項をとることができる（= (10b)）。

- (10) a. *schicken* (x が^s y に z を贈る) $\lambda z \lambda y \lambda x (\text{schicken}) (x) (y) (z)$
 $[\text{VP } x [\text{VP } y [\text{VP } z \text{ schicken}]]]$
 a. *groß* (x が^s 背が^s 高い) $\lambda x (\text{groß}) (x)$
 $[\text{VP } V [\text{AP } x \text{ groß}]]$

ただし、素性が $[(-N, -V)]$ である（つまり $[+V]$ でない）前置詞も二項述語のひとつであり、二項（たとえば主語と場所句）の関係をとりもつ関数（Funktion）であると考える研究もある（= (11) ; Cf. Eroms 2000, Kroeger 2004）。

- (11) *auf* (x が^s y の上にある) $\lambda y \lambda x (\text{auf}) (x) (y)$
 $[\text{PP } x [\text{PP } \text{auf } y]]$

また、(9) のアプローチでは、 $[-N]$ の素性を割り当てられたものだけが名詞に格を付与（Kasuszuweisung）できる能力があると説明される。実際、英語では、動詞と前置詞のみが目的語となる名詞句に格を付与する。しかし、この点は英語には当てはまるが、ドイツ語には当てはまらない。ドイツ語では、形容詞の中にも格支配（2格、3格）をするものがあり、また、名詞さえも2格を付与することがあるからである（= (12a-c)）。

- (12) a. Sie ist ihrem Vater⁺³ *sprechend ähnlich*. (彼女は父親そっくりだ。)
 b. Er ist meiner Hilfe⁺² *bedürftig*. (彼は私の助けを必要としている。)
 c. Die Tochter der Frau⁺² ist Ärztin. (その女性の娘さんは医者だ。)

(9 a-d) は言語横断的に見ると欠点が多いが、前置詞については語彙範疇を特徴づける素性が両値ともマイナスであることから、少なくとも前置詞が語彙範

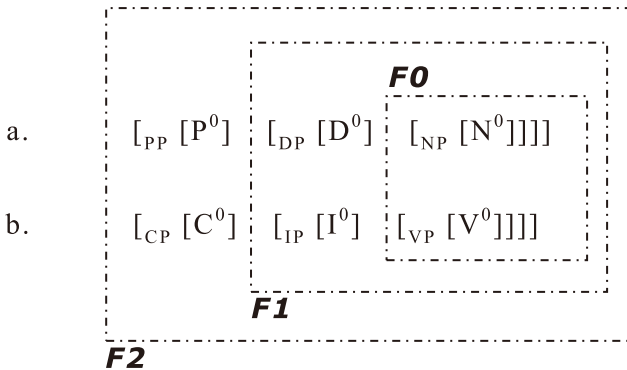
疇の中ではもっとも“語彙範疇らしくない”ということは伝えている。

Grimshaw (1991, 2003) は、次の (13), (14) に挙げる「F 価」(Funktionale Werte) の概念を導入し、前置詞 (P) の機能性を説明しようと試みている。これによれば、前置詞 (P) は限定詞 (D) 及び名詞 (N) の上位に投射したより機能性の高い主要部であることがわかる。

- (13) The key is the hypothesis that the same category features are assigned to N and the functional heads which occur about it (=N), including D and P.

(Grimshaw 2003: 2)

- (14) 「F 価」(0 が最小 = 機能性がない)

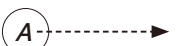


3. 成句・熟語表現の中の前置詞

前節で見たように、前置詞は機能性の高い品詞であり、前置詞の個々の意味ではなく、機能的意味を理解することで、とりわけ熟語表現においてどの前置詞がどの動詞と結びついて使用されるのかが説明できる。本節では、*von* と *über* という2つの前置詞を扱うこととし、それぞれの前置詞の熟語的・機能的意味を概観する。その上で、両者が同じ文脈で隣接的に使用可能である文例 (7 a-b) について検討する。なお、その他の前置詞については稿を改めることとする。

3.1. 前置詞の機能的意味

前置詞 *von* の機能的意味は〈起点〉である (= (15a))。 (15b) に見られる *von* は「疲れるに至った原因」を表しているが、これは「状況の〈起点〉」と読み替えることができる。 (15c) の *von* は「話す／伝える話題の中身」を表しているが、これは換言すれば「話の〈起点〉」であると解釈できるだろう。

(15) a.  'von A'

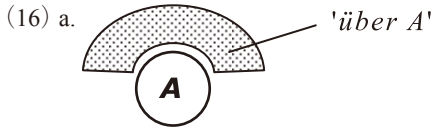
b. Wir waren müde von der Anreise, das Schiff wollten wir uns am nächsten Tag genau anschauen. (Nürnberger Nachrichten, 17. 01. 2012)

(私たちは旅先への移動で疲れ切っていて、船は次の日にゆっくり見ようということになった。)

c. Ich habe in allen Jahren immer wieder von meiner Heimat in Leipzig geredet. Wer mich kennt, weiß, dass dies in jedem Jahr hier etwas weniger wurde. (Rhein-Zeitung, 05. 06. 2012)

(毎年、ライプツィヒ市内の地元のことについて繰り返し伝えてきた。私を良く知る人なら、それがここ数年はその頻度が減ってきたことに気がつくだろう。)

前置詞 *über* の機能的意味は〈ある対象の上方〉である (= (16a))。 (16b) には *über* が2回用いられている。一つは「～に対して怒る」という成句のうちの「～に対して」に相当する部分で、「対象となる人」の〈上方〉を怒りが覆いつくしていると考えることができる。同様の表現に、*sich über et⁴ freuen* (～を喜ぶ) というものがある。「対象となるモノ」を「喜び」が包み込んでいるイメージを持つことができればよい。もう一つは、「向こう側へ」を意味する用法の *über* で、これは「A 地点から B 地点の〈上方〉を越えて C 地点に至る」様子を表していると理解できる。A 地点から C 地点を見ると、B 地点を横切っていることになる。 (16c) の *über* は「従事中に」を意味する。ある出来事が、そこにある対象物を中心に、その〈上方〉で生じ、そして経過する。



- b. Wer hat sich noch nicht **über** Radfahrer geärgert, die bei Rot **über** die Ampel fahren? (Hamburger Morgenpost, 11. 04. 2012)

(赤信号で道路を横断する自転車に腹を立てたことがない人はいるのだろうか?)

- c. Er war mit einem Schulbus in einen Stau geraten und **über** dem Lenkrad eingeschlafen. (Rhein-Zeitung, 24. 09. 1998)

(その男はスクールバスを運転していて交通渋滞につかまり、ハンドルを握りながら居眠りをしてしまった。)

3. 2. 前置詞の隣接的選択

(17) に示すように、前置詞 *von* と *über* は「話題・主題」という用法においては共通している。しかも、ある程度までは、同じ動詞と結びつくことができる。ただし、無条件に交替可能というわけではない。両者は、用法としてはかなりの程度まで似ているが、その機能的意味が異なっているという点で、この現象を「隣接的選択 (Selektionsadjazenz, -nachbarschaft)」と名付けておく。

- (17) a. Derzeit wird gerade **über** eine Möglichkeit **diskutiert**, mehr Kunden zum Einkaufen in das Stadtzentrum zu holen. (= (7 a))

- b. Das "Land des Lächelns" von Franz Lehár **erzählt von** der tragischen Liebe zwischen dem chinesischen Prinzen Sou Chong und der österreichischen Komtess Lisa. (= (7 b))

- b'. In der französischen Tradition der Komödien **über** kleine Probleme **erzählt**. (Tiroler Tageszeitung, 14. 02. 1997)

(フランスの喜劇の伝統では小さめの諸問題が風刺として語られる。)

- c. Unter den studentischen Projekten der Film- und Fernsehhochschule ist

der **Film** "Freie Ferse" (1994) von Katharina Werner **über** die Schuhmacherin Annette, die **von** Beruf und Berufung **berichtet**, beeindruckend. (Berliner Morgenpost, 12. 04. 1999)

(映画・テレビ専門学校で制作された学生作品のうち、カタリーナ・ヴェルナーによって職業と天職について語る靴職人アネッテを描いた映画『気ままなかかと』(1994)は感銘を受けるものであった。)

d. Ursprünglich haben wir schließlich mal nur **über** den Austausch von drei Straßenlampen **geredet**. (Rhein-Zeitung, 28. 01. 2011)

(そもそもは、3基の街灯の取り替えについて口にしただけなのだ。)

d'. Doch je mehr **von** unserer Liga **geredet** und **geschrieben** wird, desto besser. (Zürcher Tagesanzeiger, 10. 05. 1996)

(このリーグについてより多くのことが語られ、書き記されればされるほど、良い。)

e. **Worüber** habe ich da **gesprachen**? Darüber, dass Fragen und Unverständnis entstehen, wenn man sieht, was in Deutschland **über** Russland **geschrieben** wird [...] (Hannoversche Allgemeine, 08. 03. 2008)

(何について話したのか?それは、ドイツ国内でロシアについて書かれたものを目にするとき「中略」に感じる疑念や理解できない事柄についてである。)

e'. Der Veranstalter hatte zunächst nur **von** einem Überraschungsgast **gesprachen**. (Braunschweiger Zeitung, 17. 01. 2012)

(はじめ、主催者は一人のサプライズゲストのことを話すのみだった。)

(17a)において、*diskutieren* (議論する) という行為は独りでは成しえず、複数の参与者 (議論参加者) が必要になる。すると、議論参加者の〈上方〉を議論される主題が飛び交うことになる。その結果、主題内容は前置詞 *über* で導入されることとなる。(17b,b') では動詞 *erzählen* (物語る) は、主題内容に応じて前置詞 *von* と *über* のいずれとも共起しうることが示されている。*von* の機

能の意味は〈起点〉であるから、その主題をきっかけとしてさらに話が展開されている様子が想像できる。それに対して、*über* は〈上方・覆う〉であるので、その主題の経緯が順を追って語られることになる。(17c) の *Film* (映画) は動詞ではないが、主題 (ここでは靴職人のアネッテ) の半生が時系列で丁寧に (*über*) 描かれているのだろうということが想像できる。以下、同様に、動詞 *reden* (話す・スピーチする) は *über* (= (17d)) と *von* (= (17d'))、動詞 *schreiben* (書く・記す) は *von* (= (17')) と *über* (= (17e))、動詞 *sprechen* (話す・発言する) は *über* (= (17e)) と *von* (= (17e')) で使い分けられている。

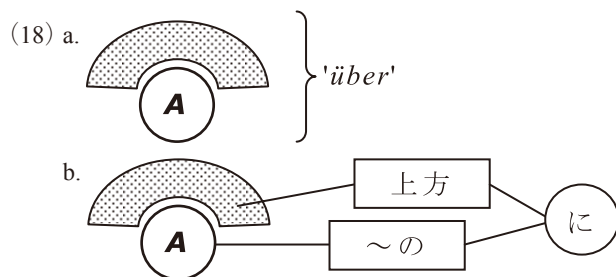
前置詞の隣接的選択は、恣意的なものではなく、前置詞そのものの機能的意味と主題の内容の相関に基づいていることがわかる。独りではその行為を成しえない *diskutieren* のような動詞を除いて、「～について」という日本語に対応するフレーズが選択する前置詞は動詞に応じて一義的に決まるのではなく、その主題内容の“伝えられかた”(その話を起点に話が展開するのか、それともその話を順に追って語られるのか) によって決まるのである。

4. おわりに

本稿では、独検問題での前置詞選択問題の誤答率の高さを数字で見えることを手がかりとして、ドイツ語初級者が個々の前置詞の意味を〈点〉として覚えようとするあまり、〈面〉として存在しているはずの前置詞本来の機能性を理解できていないことを示した。動詞が特定の前置詞と組み合わせられる成句においても、動詞と前置詞は必ずしも 1 対 1 に対応するのではなく、前置詞の機能性が主題に対してどのように投影されるのかによって選択されるべきであること(隣接的選択)を見た。

最後に、日本語の助詞が完全な機能的主要部 (funktionale Köpfe) であるのに対し、ドイツ語の前置詞は語彙的かつ機能的 (lexikalisch-funktionale Köpfe) であるという範疇上の違いについて示唆しておきたい。すなわち、ドイツ語の前置詞は一語で A と B の関係(場所・時間・様態・手段など)を表している

のに対し (Cf. (15a), (16a), (18a)), それらを日本語に対応させようとする
と「名詞+助詞」という複合的な句になるのである (= (18b))。



この「名詞」の部分こそ、その前置詞の核となる機能性の部分であり、これがドイツ語の前置詞を〈点〉ではなく〈複合的な〉〈面〉として見なければなら
ない理由である。

ドイツ語には、他にも、動詞 *freuen* (喜ばせる) において〈出現〉を意味する *auf* と〈上方〉を意味する *über*、さらには〈接点〉を意味する *an* の3者が
使い分けられるなど、特筆すべき隣接的選択が見られる。これらをより認知的
に把握するための試みについては、稿を改めて論じたい。

資料

ドイツ語学文学振興会 [編] (2011, 2012) : 『独検過去問題集 〈5級・4級・3級〉』。郁文堂。
[=DDJ]

参考文献

- Abney, S. P. (1987) : *The English noun phrase in its sentential aspect*, Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Chomsky, N. (1981) : *Lectures on Government and Binding: The Pisa Lectures*. Holland: Foris Publications. Reprint: Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 1993.
- Chomsky, N. (1986) : *Knowledge of Language: its nature, origin and use*. New York: Praeger.

- Eroms, H.-W. (2000) : *Syntax der deutschen Sprache*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Grimshaw, J. (1991) *Extended Projection*. Ms., Brandeis University.
- Grimshaw, J. (1997) : "Minimal Projection, Heads, and Optimality." In: *Linguistic Inquiry* 28/3, 373-422.
- Grimshaw, J. (2003) : *Extended Projection*. (Revision of the paper originally written in 1991) Ms., Rutgers University.
- Kroeger, P. (2004) : *Analyzing Syntax*. Cambridge University Press.
- 成田節・中村俊子 (2004) : 『冠詞・前置詞・格』. 浜崎長寿他〔編〕〈ドイツ語文法シリーズ 第3巻〉大学書林.
- Riemsdijk, H.C. van (1993) : "Complements, Adjuncts and Adjacency". In: L.Tasmowsky & A. Zribi-Hertz (eds.) *De la musique à la linguistique – Hommages à Nicolas Ruwet*, Communication & Cognition, Ghent.
- Stowell, T. (1981) : *Origins of Phrase Structure*. Ph.D. Dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

—たなか まさとし・法学部准教授—